
平成30年度 第1回午前

桐蔭学園 中等教育学校・中学校 学力検査問題

国 語

平成30年2月1日 施行

注意事項

1. 試験開始の合図^{あいず}があるまで、この冊子^{きつし}の中を見てはいけません。
2. 机の上には、えんぴつ・シャープペンシル・消しゴム・受験票・座席券・時計以外のものを置いてはいけません。受験生^{くしけんせい}どうしの貸し借り^{かひかり}もできません。また、机の中には何も入れてはいけません。
3. けいたい電話は、必ず電源を切って、かばんの中に入れておいてください。
4. 問題冊子^{きつし}の印刷^{いんさつ}が見えづらかったり、ページが不足したりしている場合、また、えんぴつなどを落としたり、体の調子が悪くなったりした時は、だまって手をあげてください。
5. 問題冊子^{きつし}のあいているところは自由に利用してかまいませんが、どのページも切りはなしてはいけません。
6. 記述問題において、小学校で習わない漢字はひらがなで書いてもかまいません。
7. 問題は16ページまであります。
8. 問題冊子^{きつし}は持ち帰ってください。

一 次の①～⑩の文中の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① この店ではジュウギョウインを増やすことが必要だ。
- ② 北国では雪虫が飛ぶといよいよ雪のキセツだという。
- ③ 大型の台風が日本列島を南から北へとジュウダンした。
- ④ 核軍縮で存在感をハツキしてきた日本の外交に影を落としそうだ。
- ⑤ 日本語教師を日本から招き、読み書きを徹底して教えるハウシンを立てた。
- ⑥ 二人のそんな姿は読者の記憶にも鮮明にキザまれた。
- ⑦ 道路案内のヒョウシキに思わず目が行きました。
- ⑧ 臓器イシヨク法の施行から二十年になりました。
- ⑨ 急に自分の性格を変えることはムズかしいものです。
- ⑩ 今日はおカゲンはいかがですか。

二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

チョウがひらひら美しく飛んでいる。何の気なしに見ていれば、それだけのことである。しかし、もう少しよく見てみると、そのチョウがどこでも飛んでいるわけではないということがわかってくる。環世界かんせいかいという言葉を使えば、われわれの側から見れば、木があり、道があり、家があるという世界の中で、チョウはチョウなりにその環世界を構築しているはずなのである。

ぼくはもうずいぶん前から、チョウの研究をしているので、そのようなことを考えざるを得なかった。すでに、『チョウはなぜ飛ぶか』（岩波書店、一九七五年）という本にも書いているので、読まれた方も多いかもしれないが、その本の中でぼくは、ある意味では、じつにくだらなことに関心をもつてしまった。

それは、ナミアゲハ、つまり、黄色と黒の縞模様しまもようをもった普通のアゲハチョウである、あのナミアゲハが飛んでいるのをよく見てみると、その飛ぶ道は決まっているのである。たとえば道の右側は飛ぶが、左側は飛ばない。それはなぜか、ぼくにはわからなかった。人に話すと、チョウがどこを飛んだっていいじやないですかと言われたけれども、ぼくにとってはやはりそういつてしまうわけにはいかなかった。なぜ、右側は飛んで、左側は飛ばないのか。こういうくだらないことを一生懸命考けんめいえたり、調べたりした。

結果的にわかったことは、非常に単純であった。

ナミアゲハは日がよく当たっている木のこずえに沿って飛ぶのである。だから、たとえば、右側に木があったとすると、アゲハチョウはそこを飛んで、木が生えていない左側は飛ばない。あるいは、木は両側に茂しげっているのだが、たまたま太陽の具合で左側の木のほうには日が当たっておらず、右側の木のこずえだけに日が当たっていると、アゲハチョウは右側の木のこずえだけに沿って飛ぶ。左側の日陰ひかげになっている所は絶対に飛ばない。それを見ていると、チョウはいつも決まった道を飛ぶことになる。それだけの話だということがわかった。

道が曲がっていると、日差しも変わる。すると、場合によっては右側の木のこずえが日陰になって、左側の木のこずえに日

が当たるようになることもありうる。そうすると、そこまできたときに、アゲハチョウは道の右側から左側にわたるのである。それもこちらから見ていて、あそこでチョウは道をわたるぞということが予測できる。そして、実際にチョウはそのように行動する。

アゲハチョウが見ている、**A** 彼らが構築している環世界では、日の当たっている木のこずえは非常に重要なものとして浮かび上がっていて、チョウにとってはそれしか見えず、チョウはそこを飛んでいくということになる。

ぼくははじめ、日が当たっているかどうかということは気にしなかったので、チョウは緑の葉っぱの所を飛ぶのだろうと思っていた。ところが草原の中に、木がずっと並木になって生えている場合がある。そのとき、アゲハチョウは緑の草原の上をあらゆるこちらと飛びまわることはほとんどなく、木に沿って飛んでいく。ただし、その木のこずえに日が当たっていればの話である。

B 同じように木の生えている所でも、モンシロチョウはまた別の所を飛んでいる。モンシロチョウは木のこずえに沿って飛ぶことは絶対がない。② たまたま風に吹き上げられたとしても、彼らは急いで下りて、下の草原に行ってしまう。そして、その草原の上はどこでも飛ぶ。決まった道があるとはどうしても思えない。どちらもチョウでありながら、こんなに違う。それはなぜかということいろいろ考えてみた。

アゲハチョウの仲間、とくにナミアゲハは、カラタチとか、ユズなどのミカン科の木の葉っぱに卵を産み、幼虫はその葉っぱを食べて育つ。**C**、その木の上でサナギになり、羽化する。

オスはなるべく新しいメスを探して、自分の子を産んでもらいたい。**D** 一生懸命にメスを探す。そのためにオスは飛んでまわるのである。

新しいメスがいる可能性がある所とはどこか。カラタチとか、ミカンとか、ユズなど、ミカン科の木のある所である。イネ科の草が生えている草原とか、キャベツがある畑とかに、新しいメスが出てくる可能性はほとんどない。だから、オスは木のこずえに沿って飛んでいなければ、メスを見つけない可能性はないのである。

しかも、ミカンとか、ユズとかいう木はいわゆる陽樹である。陽樹とは、日の当たる所に生える木である。こんもり茂った林の中に生える陰樹ではない。いまこずえに日が当たっていなければ、もしかしたらそこは、日の当たらない場所である可能性もある。もしそうだったら、そこにミカン科の陽樹が生えていることはない。そんな所を飛んでも無駄である。しかし、いま日の当たっている所は、一日のうちで必ず日が当たる所だから、そこに陽樹が生えている可能性は非常に高い。彼らが構築している世界はそのような木のあるところである。彼らはその世界の中を飛ぶのである。

③ 同じことはナミアゲハのメスについてもいえる。

ナミアゲハのメスは、卵を産む。卵を産むべき場所は、ミカン、カラタチ、ユズというミカン科の陽樹の葉っぱである。地上にはいろいろな植物、いろいろな木が生えているから、どこに何が生えているかわからない。チョウの鼻（触角）はそんなに遠くまで利くわけではないので、遠くからミカンやユズの匂いがして、そこに飛んでいくということとはできない。彼らはずっと探しまわりながら、近くにきたときにほんのりと香る匂いをかぎ、あつ、ここにユズがありそうだということを察知する以外に方法がないということが、調べていてわかった。

そうすると、メスも同じように、日の当たる木に沿って飛んでいって、たまたま生えていたミカン科の木の匂いを感じると、それにとまり、肢先でそれを確かめて卵を産むのである。だから、彼らにとって意味のある木はそのようなミカン科の木である。草はまったく関係ない。彼らにとって草はあってもなくても関係がない存在なのである。

ところがモンシロチョウは、普通、幼虫はキャベツで育つが、本来はナズナ（ペンペン草）やイヌガラシなどのような野生のアブラナ科の草の葉っぱを食べる。したがって、卵を産むときもそういう所に産むし、新しいメスが出てくるのもそういう場所である。草のまったくない道の真ん中とか、グラウンドの真ん中といった所でモンシロチョウが生まれてくることもないし、卵を産む草が生えていることはない。木の上にもそのような草は生えていない。そのためモンシロチョウは草の生えたところを探し回ることになる。風に吹き上げられて木の上にあがってしまったときにも、早く草のあるところに戻らなければと下りてくる。

草原は、広く広がっているから、太陽は真上から照っている。今いったようなアブラナ科の植物はみんな日向ひなたに生える。日が当たっている所だつたらどこでもいい。草原には日向は一面にある。すると、モンシロチョウには決まった道はなく、日向の草地の上をあっちへふらふら、こっちへふらふらと飛んでいる。絶対に木の上には上がらない。日が翳かげったところにはいかない。そうすると、モンシロチョウの飛ぶ所は決まってくるわけで、彼らにとって大事な世界というのは、そのような

E であるということになる。

草原に木が点々と生えているときに、われわれは全体を見ることが出来るから、そこ全体が環境かんげい、つまり木の点々と生えた、草原全体を環境と見る。しかし、チョウにとつては、草原全体がその世界ではない。アゲハチョウにとつては、草原自体はその世界の中には存在しておらず、その草原に生えた、日の当たっている木だけが世界である。モンシロチョウにとつては木は存在していないに等しく、大事なものは日の当たっている草原である。同じひとつの場所を見たときに、人間とモンシロチョウとアゲハチョウとでは、世界はまったく違っている。ひとつの「環境」という言葉でくくってしまったてはならないし、それを客観的環境と呼ぶことは彼らにとつては意味がない。

「環世界」という言葉は昔は「環境世界」と訳されていた。これは(注1)ユクスキユルが客観的な意味での環境というのを否定して、主体の動物が積極的に構築している世界が問題だといったことを考えてみたとき、環境世界というこの言葉は、彼が言ったことを否定した訳語になる。**④** それではあまり意味がないと思つたので、④ ぼくは環世界という言葉を提唱している。

とにかく大切なのはこの環世界であつて、④ 一般的な環境が問題なのではない。

たとえばわれわれが「良い環境」と言うとき、それは清潔で安全で静かで、適当に木の緑があり、しかし「雑草」は生い茂っていないところを指すことが多い。しかもそこは教育的にも買ひもの点でも、また交通の上でも適度に便利な必要がある。

それは一般的な自然環境の問題ではなく、勤め人や通学生つうがくせいのいる一般家庭にとつての環世界の問題である。昔よく言われた「孟母三遷ぼさんせんの教え」なども、この(注2)範疇はんちゆうのことである。

緑の木も毛虫がつかない木のほうがよく、秋の落ち葉に手のかからないことが望まれる。夏にホタルが飛んでくれたら最高

だが、カヤハチはいてほしくない。人びとが価値を与えるのは、そのように限定されたものに対してである。

そうなるこのような人間にとって良い環境は、チョウとかトンボとかテントウムシ、小鳥などにとっては、けっして良い環境ではない。このような動物たちにとってこの場所は、自分たちの環世界を構築しえない環境であろう。われわれが何気なく「環境」ということばを口にするとき、そこにはつねにこのような環世界の問題が関わっているのである。

(日高敏隆『動物と人間の世界認識』より)

(注1) ユクスキュル||ドイツの動物行動学の研究者。

(注2) 範疇||物事を分類する時、同じ性質のものが入る範囲。

問1 ——線部①「じつにくだらなことに關心をもってしまった」とありますが、筆者が關心をもったのはどのようなことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ナミアゲハの飛ぶ道はほかのチョウとは異なるということ。
- イ. ナミアゲハの飛ぶ道がどのように決まっているかということ。
- ウ. ナミアゲハが認識している世界がどのようなものかということ。
- エ. ナミアゲハの飛ぶ道がどこであるかはどうでもいい問題なのかということ。

問2 本文中の空らん **A** **D** にあてはまる語として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で

答えなさい。同じ記号は一度しか使えません。

ア. そして イ. だから ウ. つまり エ. むしろ オ. ところが

問3 —線部②「たまたま風に吹き上げられたとしても、彼らは急いで下りて、下の草原に行ってしまう」とありますが、モンシロチョウはなぜそうするのですか。考えられる理由を二十字以内で答えなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

問4 —線部③「同じこと」とありますが、「同じこと」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. ミカン科の木を見つげるために、日の当たる木に沿って飛ぶということ。
- イ. 遠くからでもミカン科の木のある場所を察知して飛んでくるということ。
- ウ. 草原を飛び回りながら、触覚をたよりにミカン科の木を探し当てるということ。
- エ. 日の当たる場所を避けて飛びながら、最後にミカン科の木にたどりつくということ。

問5 本文中の空らん

E

 にあてはまる表現を、ここより後の本文中から八字以上十字以内でぬき出して答えなさい。

問6 —線部④「それではあまり意味がないと思ったので、ぼくは環世界かんせかいということばを提唱している」とありますが、ここで筆者が「環世界」と呼んでいるものはどういう世界ですか。筆者の考えに沿って五十字以内で説明しなさい。句読点などの記号も字数にふくめます。

③ 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

しづくは高等部から入学してきた。江美利は武村江美利なので、四月から三カ月間はしづくと席が前後だった。それで話すようになった。

あまり目立たなくておとなしいしづく。だけど、実は顔が小さく、近くで見ても肌が白くなめらかで、長いまつげをしている。お人形みたいに整ってうつくしい顔。整いすぎているせいで、かえってだれもしづくのうつくしさに気づかないのかもしれない、と江美利は思う。

①しづくの美は、マスカラを塗りたくったうえにつけまつげを装着し、アイラインで目を強調した大多数の女子とはまるでちがう部類だ。

S学院高等部は、男子しか制服がない。「華美な服装でなければ」女子は私服で登校してもいい。といっても、ほとんどの女子が、準制服という名の学校が作った制服を着ている。そのほうが「女子高生」だと周囲に知らしめることができるからだろう。細身で紺色のブレザーと、灰色のプリーツスカート。もちろん腿がほぼ丸出しになるぐらいまで短くして穿く。くすんだ紺色のナイロン製学校靴に、小さなぬいぐるみやらビーズのストラップやらをじゃらじゃらつけて歩く。それを見るたび、江美利は若き日の織田信長が腰にひょうたんをたくさんぶらさげていたという逸話を思い出す。尾張のうつけ者。「うつけ」という言葉が彼女らにはふさわしい。

しづくは、そんな恰好は絶対にしない。スカートは膝がちよつと見える程度の丈で、ほっそりとしなやかな脚がよりいっそう際立つ。靴には飾り気がなく、化粧もしない。たまに、「唇が荒れちゃった」と透明のリップクリームを塗るぐらいだ。それでも江美利の視界のなかで、しづくほど輝いて見える女の子はいない。男子なら奥井先輩。女子ならしづく。江美利はこの両名に、ベクトルはちがえど激しく好意を燃やしているのだった。

江美利はしづくよりも三年早く、中学からS学院に在籍しているわけだが、友だちと呼べるひとはしづくが現れるまで存在

しなかった。江美利は地味だ。どれだけ細心の注意を払って鏡を眺めても、しづくのような秘めた、しかし確固たる美はどこにも見当たらない。悪いことに社交性も欠落しており、端的に言って暗い。特筆に値する趣味も特技もなく、家と学校を黙然と往復する毎日を送っている。

友だちなんかできっこない。そんな状態に、**A** 拍車をかけるのが、携帯電話を持っていないという事実だ。両親に何度も交渉したのだが、所持を許してもらえなかった。高校生にもなって携帯不携帯なのは、S 学院ではたぶん江美利だけだろう。

江美利も、なにも好きこのんで薄暮めいた陰鬱なる日常を過ごしていたのではない。できることなら友達がほしかった。携帯だつてほしい。「あの子、暗いよね」と遠巻きにされる学校生活はもういやだ。

そこで、高校の入学式の日一念発起した。絶対に友だちをつくる。中学まで一緒だった子たちには、江美利が地味で暗くてもおもしろみがない人間なのを知られている。狙い目は、高校から新しく入ってくる子だ。江美利の暗さを知らず、友だちゼロ人の実績を知らず、新しい環境に戸惑いと心細さを覚えているであろう子。そんな子に親しげに話しかけ、親切に学校を案内でもしてあげれば、きっと友だちになれる。

こうして江美利は、**おもむく** 思惑どおりしづくと **ゆうぎ** 友誼を結んだのだ。しづくが思いがけずうつくしいひとだったのは、うれしい計算ちがいだ。

しづくはもちろん携帯電話を持っている。入学して日が経つにつれ、江美利以外に親しく話す友だちもできたようだ。派手な一団とは距離を置いておけるけれど、気立てがよくてきれいなしづくを、「暗い」と言ったりバカにしたりする子はいない。

江美利はちよつとさびしかったが、我慢した。しづくがクラスの輪に溶けこんでいくのを、**②** 少しの誇らしさをもつて見守った。

この学校でしづくと一番最初に友だちになったのは江美利だ。しづくの友だちがどんなに増えても、しづくは江美利をないがしろにせず、**ほほえ** 微笑みかけてくれる。いまみたいに。

江美利は **まんだら** 曼茶羅 (?) をこっそり見せてくれたしづくに満足し、窓の外をまた眺めはじめる。 **ほこ** フクちゃんはミイ

ラのつくりかたを懇切丁寧こんせつていねいに解説している。

緑の丘おかのてっぺん、白い建物のあたりで、なにかが小さく光を反射した。おや、と思つて江美利はしばらく丘を凝視ぎやうししていたが、気のせいだったのか、さしたる変化は起こらないままチャイムが鳴った。

お昼休みや体育の準備体操のとき、しづくと一緒に行動できるか否かいな、江美利はいつも緊張きんちやうする。しづくとペアになれば、話したこともない地味なあぶれもの同士で準備体操（柔軟じゆうなんや背筋のぼし）をしたり、教室の隅すみっこで一人で弁当を食べたりすることになる。

しづくは毎日学食で食べるのだが、その日は江美利に声をかけてくれた。江美利は母親が作った弁当を持って、しづくともにいそいそと学食へ行く。

生徒数が一学年あたり三百人なので、高等部専用の学食は常に混みあっている。しづくがカウンターへサンドイッチを買いにいった隙すきに、江美利はぬかりなく席取りをした。自分の席には弁当箱を置き、しづくのために確保した向かいの席には脱いで畳たたんだカーディガンを置く。

一安心した江美利は、無料のお茶を二人ぶん取りにいった。ヤカンからプラスチックの湯飲みにお茶をつぎ、両手にひとつずつ持つて席しに戻る。

椅子いすに座すわろうとして、動きが止まった。迂闊うかつだった。並びのテーブルにサッカー部員が塊かたまりになつて座つていた。奥井先輩もいる。一年の男子の頭を羽交はがい締めするように抱かかえ、笑っている。一年男子も笑いながらわざとらしく悲鳴を上げている。奥井先輩は今日も恰好いい。しかし問題は、このまま江美利が弁当箱のある席に座ると、奥井先輩に背を向ける形になってしまうということだ。自分の顔が奥井先輩の視界に入ること、先輩の網膜もうまくを汚よじしたくない。だが、並びのテーブルから奥井先輩をチラ見するぐらいは許されるのではないかという気もしなくはない。

ふたつの湯飲みをテーブルに置きながら、どうするべきか江美利は光速で考えた。やつぱりしづくと席位置を交代しようと

結論づけ、弁当箱とカーディガンとを入れ替えかけたそのとき、サンドイッチを買ったしづくが来てしまった。「どうかした？」

③ 中腰だった江美利は、あわてて背筋をのばし、なんでもないと言を振った。弁当箱とカーディガンはもとの位置のまま、江美利は先輩に背を向ける形で、しづくはテーブルと江美利越しに先輩のほうを向く形で、椅子に尻を落ち着けた。

しづくは「ありがとう」とカーディガンを江美利に返した。カーディガンに体温が残っていたのではないか、しづくはそれを気色悪いと感じたのではないかと、江美利は懸念したが、カーディガンはあたたかくも冷たくもなく、強いていえば室温程度だった。江美利はカーディガンを羽織り、背中にも目があったらいいのにと心の底から思った。

先輩の清潔そうな指さき。球ばかり蹴ってるわりには賢そうな面立ち。冬になつても日に焼けたままの健康そうな肌。ほがらかな、でもどこか繊細さもあるやさしい笑顔。

見たい。振り返ることはできない。

④ 弁当をひたすら食うロボットみたいに箸を動かす。しづくの様子をうかがうと、無心に食べている。せっかく奥井先輩を見ることができている位置にいるのに、サンドイッチにしか興味がないようだ。

とうとう辛抱できなくなつて、

「うしろの席に奥井先輩がいる」

と、江美利はしづくに囁いた。しづくはそこではじめて顔を上げ、江美利の背後を見た。

「ほんとだ。席かわる？」

「いい。気づかれたら恥ずかしい」

「江美利ったら、奥ゆかしいんだから」

しづくはわずかに口角を上げた。しづくこそ奥ゆかしい。

「気づかれないように、先輩の様子を実況中継してあげようか。なるべく小声かつ腹話術の要領で」

「できるの？」

「ムリカモ。ゴメンネ」

腹話術人形っぽい声真似でしづくが言ったので、江美利は笑った。しづくも笑った。

ぶーぶーと携帯のバイブ機能が作動する音がした。しづくはスカートのポケットに手をつっこみ、画面を一瞥する。メールが届いたらしい。

「まみちゃんから」

と、クラスメイトの名をあげる。江美利はしゃべったことがない子だ。ほとんどの同級生と江美利はしゃべったことがない。

『次の移動教室、第一化学室だっけ、第二だっけ』だっけ

「第二」

「おっけ」

すごい速さでボタンを押し、しづくは返信を打った。

曼茶羅描いてたくせに、清楚な美少女って感じなのに、練達の女子高生っぽい。

江美利は憧れと尊敬の眼差しをしづくに送る。しづくみたいになりたいとまた思った。

メールを返信し、しづくが携帯をポケットに戻したとたん、江美利の背後でぶーぶーと携帯のバイブ機能が作動する音がした。奥井先輩が座っているあたりだ。あまりのタイミングのよさに、江美利の胸にふいに疑惑の靄が湧く。

本当にまみちゃんからメールが来て、まみちゃんに返信したのか？ しづくは実は、奥井先輩とメールをやりとりする仲間ではないか？ 私が奥井先輩を好きだと知ってるくせに、それを応援するふりをしてきたくせに、実はしづくこそが奥井先輩とつきあっているのではないか？

しづくは江美利のいれたお茶を飲んでいる。サッカー部の面々はあいかわらず騒いでいる。奥井先輩の笑い声もする。

なにもおかしいことはない。ぶーぶーは空耳だったのかもしれない。もしくは、奥井先輩以外のだれかに、しづく以外のだ

れかからメールが届いたと考えるほうがまっとうだ。学食には二百人からの生徒がひしめきあっているのだから。蠢く二百の胃袋。目に見えぬまま、だれかからだれかへと飛び交う電波。

⑤ 江美利はふいに、文化も習慣もちがう星に放りこまれた気分おちいに陥る。内臓の配置すら自分だけ異なっているような気持ちになる。

江美利に向けて発信される電波はひとつもないというのに、視線の圧だけは敏感びんかんに感じ取るとは、不思議なものだ。食事を終え、しづくとともに席を立った江美利は、だれかに見られている気がしてふと振り返る。

奥井先輩が江美利を見ていた。正確に言うと、江美利の隣となりのしづくを見ていた。

しづくは奥井先輩の視線に気づかない。気づかないふりをしているだけかもしれない。しづくが無反応なのをたしかめ、江美利が奥井先輩に視線を戻したときには、奥井先輩はもうサッカー部員のほうに顔を向けていた。

さすが、しづく。きれいだから奥井先輩もしづくが気になったんだ。

そう思つて誇らしさをかきたてようとしたが、疑惑の靄おきが抑えようもなく体内こに濃く立ちこめだし、江美利は胞子ほうしを振りまく寸前の毒キノコ。一刻も早く体じゅうの穴という穴をふさがなければ、しづくも奥井先輩も学食にいる生徒も毒素をかぶつて阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄じごく絵図えずに放りこまれてしまふだろう。

江美利はなるべく息を止めたまま、「トイレ行つてくる」としづくのそばを離はなれる。B 期せずして、さきほどしづくが実演してみせた腹話術人形じみた口調になった。

(三浦しをん『短編少女』より)

(注1) 友誼ゆうぎを結んだⅡ友達になった。

(注2) 曼荼羅まんだらⅡ仏教的世界観を表した絵。

(注3) フクちゃんⅡ世界史担当の教師。

問1 —線部A「拍車をかける」、B「期せずして」の用法として正しいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「拍車をかける」

ア. 日光への修学旅行は、想像していた以上に拍車をかける楽しさだった。

イ. 中学生生活最後の公式戦にチーム全員が拍車をかける戦いにいどんだ。

ウ. 思うに、先日亡くなつた祖父の一生は波乱に満ち、拍車をかけるものだった。

エ. オリンピックでの日本人の活躍が、国内の卓球人気に拍車をかけることとなった。

B「期せずして」

ア. 今回のマラソン大会にむけて期せずして練習した結果、入賞することができた。

イ. 先日旅行した時、小学校時代の友人と期せずして同じ新幹線に乗り合わせた。

ウ. 期末試験の失敗は、期せずして勉強したことが大きな原因だと反省している。

エ. 姉が入院する病院へ、期せずして見舞いに行くことは固く禁じられている。

問2

線部①「しづくの美は、マスカラを塗りたくつたうえにつけまつげを装着し、アイラインで目を強調した大多数の女子とはまるでちがう部類だ」とありますが、ここから江美利のどのような気持ちが変わりますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 女子高生が行き過ぎた化粧をしていることをにがにがしく思う気持ち。

イ. はなやかな美しさをもてはやす世の中の風潮を非常に残念に思う気持ち。

ウ. しづくの化粧がほかの女子高生と違って个性的なのを強調したい気持ち。

エ. しづくの美しさが一般の女子高生の美しさを超えていることを喜ぶ気持ち。

問3 —線部②「少しの誇らしさをもって見守った」とありますが、ここでの江美利の気持ちの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. おとなしくひかえめなしづくに江美利以外にも多くの友だちができたのは、しづくに積極的に声をかけて心を開いた自分のおかげだと自負している。

イ. 高校から入学してきたしづくが、周りから好かれ人気者になったのは、自分が最初にしづくと友だちになりきっかけをつくったからだと自慢に思っている。

ウ. 派手で目立つ集団とは積極的に交わらないしづくがバカにされないのは、中学からこの学校に在籍する自分と友だちになっているからだと得意になっている。

エ. しづくに自分以外の友だちができて、きれいなしづくの最初の友だちは自分であることや、今後のしづくとの関係が確かなものであることに自信をもっている。

問4 —線部③「中腰ちゆうようしだった江美利は、あわてて背筋を伸ばし、なんでもないと首を振った」とありますが、このときの

江美利の気持ちの説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 奥井先輩おくいせんぱいとしづくがつき合っているのではないかと疑っていることを、しづくに知られたくないという気持ち。

イ. 奥井先輩に対して自分がほのかな恋心を長い間いだき続けていることを、しづくに知られたくないという気持ち。

ウ. 奥井先輩の姿をよく見ることができるようになるように仕組もうとしていたことを、しづくに知られたくないという気持ち。

エ. 奥井先輩に関して、しづくに勝てるはずがないと落ち込んでいたことを、しづくに知られたくないという気持ち。

問5 ——線部④「弁当をひたすら食うロボットみたいに箸を動かす」とありますが、これはどのような様子を表していますか。説明しなさい。

問6 ——線部⑤「江美利はふいに、文化も習慣もちがう星に放りこまれた気分おちいに陥る」とありますが、その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 背後から聞こえた携帯電話の作動音は空耳だったにもかかわらず、しづくと奥井先輩の関係を疑い始めたのをきっかけに、自分だけが仲間はずれになったような気持ちを感じたから。

イ. 携帯電話の作動音を耳にしたとたん、この食堂の中で携帯電話をもっていないのは自分だけだと思ひ始め、この世の中からはじき出されたようなとてつもなく暗い気持ちになったから。

ウ. 携帯電話のバイブの作動音をきっかけに、信じていたしづくに裏切られているのではないかという思いにとらわれ、携帯電話を持っていない江美利はいつそう孤立こりつした気持ちになったから。

エ. しづくが江美利の話したことのないクラスメイトとメールのやり取りをするのを見て、それに嫉妬しつせしん心をいだき、このまま携帯電話を持たないでいるとしづくが遠い存在になってしまうという不安と孤独こどくを感じたから。

(お わ り)

国語解答用紙

教室番号

座席番号

受験番号

氏名

※のらんには何も書かないこと。

一

⑩	⑥	①
しい		
⑩	⑥	②
	まれた	
	⑦	③
	⑧	④

二

問1

問2

A

B

C

D

問3

20

問4

問5

10

問6

50

三

問1

A

B

問2

問3

問4

問5

問6

※

※

※

※

※

※

※